（様式３号）

学 位 論 文 の 要 旨

氏名　　砂川　博史

〔題名〕

利便性に配慮した高齢者へのがん検診受診勧奨の重要性
～山口県がん登録の解析より～

〔要旨〕

目的：がん検診の受診に関して、年齢や性別に加え、高齢化や過疎化といった地域特性も考慮して現状の分析を行い、がん検診の受診率向上に資する提言を行うこと。
対象と方法：山口県がん登録の2008～2014年のデータの内、胃がん、大腸がん、肺がんの年齢31～80歳の男女25,044例、子宮頸がんの年齢21～90歳の女1,984例を抽出し、発見時進展度、発見経緯、医療圏内発見率等について解析を行った。
結果：子宮頸がんでは年齢層が上がるほど早期の患者数が減ったが、他のがんでは不変もしくは微増を示した。すべてのがん種において、発見経緯で検診等を契機に診断された例では早期が多く、症状受診では早期は少なかった。年齢層が上がるほど検診等の割合が減る一方、検診等の患者では、年齢層が上がっても早期割合は維持できていた。医療圏内受診率は年齢層が上がるほど高くなっていた。
子宮頸がんでは年齢層が上がるほど早期割合が減少した。発見経緯別に分けても、それぞれの群に同じ傾向がみられた。圏内発見群では圏外発見群より早期割合が多かった。この結果は他のがん種では見られなかった。二次医療圏毎の、圏内受診率と早期割合、検診等割合は正相関を示した。
考察と結論：高齢者で検診等による発見割合が低下する要因の一つに定年退職による受診勧奨システムの変化が考えられた。がん罹患率が急増する高齢者にこそ重点的積極的な勧奨が必要で、効果が期待されるかかりつけ医からの勧奨に加え、退職手続きの場や、地域保健の中での勧奨、高齢者でも検診発見例は早期が大多数を占める等の魅力的な事実の提供等、きめ細かい対策が求められる。加えて子宮頸がん検診では圏内受診が早期発見につながる可能性が示唆されたことから、検診施設と受診者の地理的関係など、受診利便性についての配慮も重要と考えられた。

作成要領

１．要旨は、８００字以内で、１枚でまとめること。
２．題名は、和訳を括弧書きで記載すること。

(様式９号)

学位論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第１５３０号	氏　名	砂川 博史

論文審査担当者	
	主査教授　浅井 義之
	副査教授　石田 博
	副査教授　田邊 剛

学位論文題目名（題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。）
利便性に配慮した高齢者へのがん検診受診勧奨の重要性～山口県がん登録の解析より～

学位論文の関連論文題目名（題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。）
退職後高齢者へのがん検診受診勧奨の重要陸～山口県がん登録の解析より～

掲載雑誌名　山口医学　第 68 巻　　第 1 号　（ 2019 年　掲載・掲載予定）

（論文審査の要旨）

本論文は、登録されたがん患者（胃がん、大腸がん、肺がん、子宮頸がん）の発見経緯と発見時の進展度、診断の医療圏域内外の庸報を使って、検診受診率の向上のための策を提案したもの。患者を年齢階級別に整理し、年齢が上がるにつれて健診由来の患者が減少することから「定年」による検診勧奨システムの断層を指摘し、その変化をなくすべく配慮することを提案、また、代わりに「他疾患管理中の偶然の発見」割合が増えていくことからは、年齢的に他疾患についての「主治医」を持っ人々が増えているためと認識し、効果的だと言われている主治医（医師や保健師）からの積極的勧奨を提言している。また、子宮頸がん患者の進展度が、医療県内発見が圏外発見よりも軽いことを指摘し、二次医療圏毎の医療県内発見率が検診受診率や進展度早期割合との良好な相関を示したことから、身近な環境での検診受診が早期発見と予後改善に資するとの結論を下し、受診環境の整備の重要陸を指摘し鳥更に、どのがん種においても、検診発見では年齢が上がっても早期割合は他の発見経緯よりも明らかに高いことから、高齢者においても検診を勧奨する価値と意義があるとも述べている。山口県のがん検診受診率の向上を図る際に、働きかける対象とその時期、また、利便性をより向上させることの重要陸等、大いに考慮すべき提言がなされている。よって、審査委員全員は、本博士論文が著者に博士（医学）の学位を授与するに妥当で、高く評価できる認め、本審査合格と判断した。

備考　審査の要旨は８００字以内とすること。